○吾人百姓の感情にも觸れ得る樣に、色や形を描立ててもらひたい。これが畵家君に對する、吾人の希望の全部である。

○私等は人を招く樣な時には。部屋はよくかたづけて、塵一本でも落さぬ樣にする。床の上にいろんなものを積立てたり、柱に古着をぶらさげたりする樣な事は、失禮だとかねがね思つて居る。

○一寸失禮だが、S君の繪はがき主義とくらべて見た。吾人の主義は、果然無裝飾の裝飾とでも、いふ樣なものであつた。S君、幸に味ひ給ひ得ば幸甚。

○庭に自然に生へる艸なら生して置け。自然に落ちる木の葉は、掃き捨てずにと。是が自然主義といふ肩書の付くS君の言。秋の末、山寺の垣根の下に、木の葉が一面に散り敷いて居る所などは、いかにも寂みがあつて、S君たまらない程よい相だ。あれだから、清水の立派な燒を、尋常一年の子供の、粘土細工と取りかへて、得意がられるのだ。

無裝飾の裝飾主義者たる吾人は、飽く迄掃きすてゝ、ぬきすてて、清めに清め上げよといふのである。

○變化の大切な事ばかりを、口を極めて主張し給ふ。成る程大切は大切。然し吾人は變化のみが、唯一の美の要素とは、決して思ふては居らぬ。人の變化を云ふ時に、吾人は反抗的に、嚴正をかつぎ上げたく思ふ。借問す、行儀よいのと、じだらくなのと、どちらがよい。

徳島へ

徳島　成節生

コバルトと**ローズ**とを流したやうな、うららかな彌生の一日、**スケツチ**箱や三脚を友として、徳島公園へ出かけた。ここは舊藩主蜂須賀侯の城趾で、四時の眺め惡しくはない、道程三里、麥綠、菜花を以て織りなせる錦の上を歩んで行つた。

公園は到る處春の光が行きわたつて、芝生は一面の**エメラルドグリーン**に、櫻花は**ローズマダー**に、松といはず、杉といはず、柳も、樫も、皆冬の衣をぬぎすてて、春衣を飾つて居る、**ベンチ**にも、木蔭にも、高き所も、低き所も、わかきあり、老たるあり、男あれば、女あり、瓢さげたるあれば、握飯結びたるあり、といふ樣、千態万樣とは、こゝでは生きた形容語、私は鐵面皮にも、**スケツチ**箱を開いた、遠景に眉山、中景に松林、近景には爛熟たる櫻樹、(月並ではあるけれども)寫しはじめた。物珍らかなので、人の山が周圍にできた、口から生れた見物人、あれが眉山、それがあの松林、今のが櫻などゝうるさくつてしかたがない、それでも八ツ切、十六切、二枚は物になつた、終ると氣が清清した。すぐ中央なる城山へ上つて四方を打眺めた、足下は人口六萬の徳島市街、近くは銀針の如き吉野川、紀淡の海を隔てて、東北遙かなるは紀攝の連山で、煙の樣に淡く霞に包まれて居る。私はかゝる境へ來ると、いつも自然の偉大崇高といふ感にうたれるのである、西の空が**オレンヂ**に輝いた時分歸途についた。